

4月17日（火）に本校6年生児童を対象に実施した「全国学力・学習状況調査」についての結果がまとまりました。本調査では、国語・算数・理科の3教科のテストと同時に、家庭での過ごし方や学習時間を問う調査も実施しており、生活習慣と学力との関係など、本校の子どもたちの状況をお伝えします。

総合結果(国語・算数・理科)

国語・算数・理科のテストでは、これまでの学習で身に付けておかなければならない基礎・基本の力を問うA問題と、自分がもっている知識や技能等を様々な場面で活用する力を問うB問題があります。本校は、国語・算数・理科の3教科全てで京都府・全国平均を上回りました。特に、国語と算数のB問題における記述式問題では、本校の平均が京都府・全国平均よりも非常に高かったことから、本校が研究で取り組んでいる生き方探究教育を通して、自分の考えをまとめ、表現する力が身に付いてきていると言えます。

国語科より

A問題・B問題ともに、全ての設問で京都府・全国平均を上回りました。

A問題では、「文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書く」（設問番号5）と「相手や場面に応じて適切に敬語を使う」（設問番号7）が特に平均を大きく上回りました。例年、本校では漢字の読み書きや主語・述語の関係などの言語事項が課題に挙がるのですが、今回の学力・学習状況調査では言語事項に関する設問も非常に高い正答率でした。普段から主述の関係に気を付けたり、学習した漢字をきちんと使おうと意識して文章を書いたりしていることが今回の結果につながったのではないかと思います。今後も、国語の授業だけでなく様々な学習場面を通して、これまでに習った漢字を活用したり、主語・述語・修飾語などの関係に気を付けて正しく文章を書いたりすることを意識付けしていきたいと思います。

B問題では、【話すこと・聞くこと】【書くこと】の領域における「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる」（設問番号13）が京都府・全国平均を大きく上回りました。また、【書くこと】の領域における「推薦するためには、他のものと比較して書くことで、よさが伝わることを捉える」（設問番号23）も平均を大きく上回りました。これは、国語の授業だけでなく、他の教科においても自分の思いや考えを分かりやすく書きまとめる活動を大事にしていることが書く力の向上につながっていると考えます。しかし、一方で文章を書くことに苦手意識があり、自分の考えをなかなか書きまとめることができない児童もいます。自分がどのように考えたのかを順序立てて分かりやすく書きまとめる力は、中学、高校と進学するにつれてますます大事になってきます。様々な場面で書く活動を取り入れていくことで、自分の考えを書きまとめることに慣れ、書くことへの抵抗を和らげていきたいと考えています。

算数科より

国語と同様に、算数のA問題・B問題の全ての設問において京都府・全国平均を上回りました。

A問題では、【図形】の領域における「示された表現方法を基に、空間の中にあるものの位置を表現することができる」（設問番号6）と「直径の長さと円周の長さの関係について理解している」（設問番号7【2】）が京都府・全国平均を大きく上回っていました。一方で、【数と計算】の領域における「1に当たる大きさを求める問題では、除数小数である場合でも除法を用いることを理解している」（設問番号1【3】）と「小数の除法について理解している」（設問番号2）においては、京都府・全国平均を若干上回ったものの無回答率も高く、「小数のわり算」の意味をきちんと捉えられていない様子が見受けられました。本単元は、【数と計算】の領域における基礎的な内容と言えますが、6年生に限らず、苦手とする児童が多いように感じます。特に、商を決められた位まで求めて余りも出す問題や、商を決められた位で四捨五入したり切り捨てした

りする問題などは間違いが多いです。学習した時にはできていても時間が経つとやり方を忘れてしまっている様子も見られます。こうした実態を踏まえ、朝学習や宿題などを通してこれまでに学習した内容を繰り返し復習することで基礎的な内容についての理解を深めていきたいと考えています。また、速く答えを求めることだけにとらわれず、見直しをきちんとする習慣を身に付け、正確に解くことも大切にしてほしいと思います。

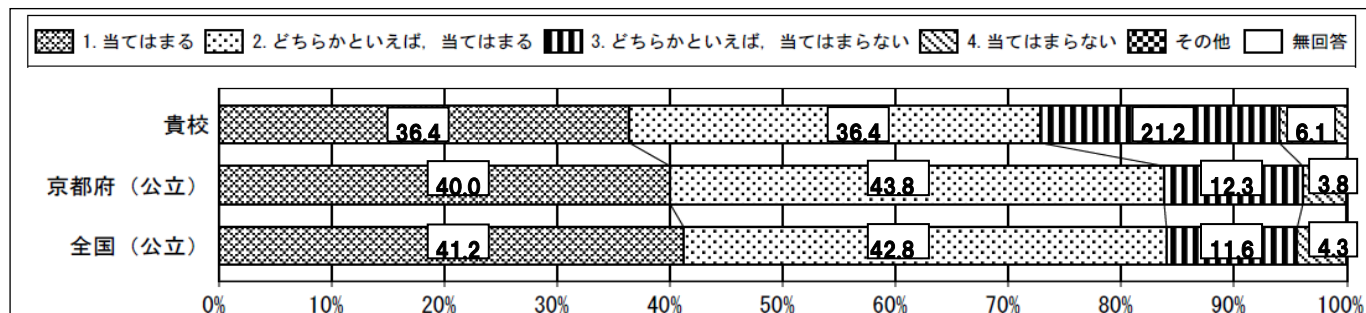
B問題では、「示された情報を解釈し、条件に合う時間を求めることができる」（設問番号2【1】）と「折り紙の輪の色の規則性を解釈し、それを基に条件に合う色を判断することができる」（設問番号5【2】）が京都府・全国平均を大きく上回っていました。どの学年においても、問題に出てくる数字の意味を考えたり答えを求めるための方法を絵や図などを用いて論理的に説明したりする学習活動を大切にして授業を行っていることがこのような結果に繋がったのではないかと考えます。

理 科 よ り

全ての設問で京都府・全国平均を上回りました。「人の腕が曲がる仕組みを模型に適用できる」（設問番号1【4】）と「実験結果から電流の流れ方について、より妥当な考えに改善できる」（設問番号3【3】）が平均を大きく上回っていました。どちらも「科学的な思考・表現」の力を必要とする設問です。自分の経験やこれまでに学習してきたことを基に予想を立てたり、実験の結果からどういったことが分かるのかを書きまとめたりする活動を積み重ねてきたことが、今回の結果につながったのではないかと考えます。一方で、「腕を曲げることでできる骨と骨のつなぎ目を表す言葉を書く」（設問番号1【3】）は京都府・全国平均をわずかに上回ったものの、理科の基礎的な内容についての理解に課題が見られました。また、「目的の時間帯だけモーターを回すため、太陽の1日の位置の変化に合わせた箱の中での光電池の適切な位置や向きを選ぶ」（設問番号3【4】）は、京都府・全国平均を僅差で上回っているものの、半数以上の児童が誤答していました。この設問は、3・4年生での基礎的な学習内容が組み合わされたものですが、複合的に考えることが難しかったようです。理科の学習においては、児童の自然事象への関心・意欲を高めるために観察や実験などの体験的な活動を重視して取り組んでいます。しかし、観察したことや実験したことはよく覚えていても、各単元でおさえておくべき理科の用語や基礎的な内容については時間が経つほど忘れていく様子が見られます。理科に限らずですが、教科書やノートをもう一度見直して学習内容を振り返るなど、自主的に復習に取り組む習慣を身に付けることが大切であると考えます。

児童質問紙調査から

○自分にはよいところがあると思いますか。



質問紙調査では、「自分にはよいところがあると思いますか」（質問番号1）という問いに対して、本校の約73%の児童は「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答していました。裏を返せば、約27%の児童が自分のよさを見つけられずにいるということになります。京都府・全国の調査結果から傾向を見ると、自分のよさを見つけられずにいる児童の割合は高いことが分かります。「先生は、あなたのよいところを認めてくれていますか」（質問番号2）の問いでは、約91%の児童が「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答していますが、周りからよさを認められていると感じていても自分に自信がもてないことが一因ではないかと思えます。本校としても、児童の自己肯定感や自己有用感を高めるための取組を今後一層進めていく必要があると感じています。